自由南アフリカの声
Voice of Free South Africa

2013 年７月

No. 62

～１冊の本が人生を変える～

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)

２０１３年７月の報告と予定

■ １月～７月　南アにて図書・学校菜園・サッカー支援活動など。
　　各地で図書研修会、移動図書館巡回、有機農業研修会実施
　　国内にて、英語の本などを収集、分類・再梱包作業
■ ３月　　TAAA２０周年記念特集　会報６１号発行
■ ５月　　TAAA 南ア代表一時帰国　報告会
■ ９月　　３００箱以上（英語の本、算数セット、サッカーボール）を南アに発送予定
■ ９月・１月 TAAA 活動報告会

目次

・南アの社会状況と TAAA の支援活動（平林薫）・・・・・・・・・・・・・・・２
・国内の活動（鯨井幸一）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
・「輸出向け」農業は人びとを救えるのか（渡辺直子）・・・・・・・・・・６
・マンデラ氏の存在感（久我祐子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
・ＮＰＯ法人化の報告（浅見克則）/毎日新聞記事・・・・・・・・・・・・９
・２０１２年度決算書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
・主な活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
・寄付を下さった方々・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

ロゼッテンヴィル小にて、有機栽培で大きく育ったタマネギを収穫した生徒たち。

南アの社会状況とTAAAの支援活動

TAAA 南ア事務所代表

平林 薫

ネルソン・マンデラ氏とオバマ大統領南ア訪問

この原稿を書いている時点（6 月末）で、ネルソン・マンデラ氏は病院で“予断を許さないが安定した状態”にあり、国内はもちろん、世界中の人たちが回復を願っています。誰もが氏の病状を気にしているとはいえ、相変わらずメディアは騒ぎ過ぎで、このような時に家族のことまでいろいろと記事にするのは本当に気の毒です。そして今、アメリカ合衆国のオバマ大統領が、大統領になって初めて南アを公式訪問しています。ズマ大統領との会談と記者会見の後、ソウェトとケープタウンで若者たちに向けて講演をしました。会場には勉強中や、すでに各方面で活躍する若者が招かれ、ソウェトの講演では出席者が大統領に質問を投げかけたり、衛星ネットワークでケニア、ウガンダ、ナイジェリアと繋いだりと素晴らしいイベントになりました。大統領の講演は“アフリカの将来を決めるのはあなたたち”と若者に向けて真摯にストレートに訴えるもので、特に彼のアフリカとのつながり、思いを感じさせるものでした。両会場に招かれた若者たちの自信に満ちた姿を見て“彼らが将来南アのリーダーになるのだな”とうれしく思う反面、私たちの地域の生徒、若者たちのことを思い、“彼らはここに招かれるどころか、テレビでこの様子を見ることも出来ないんだ”という大きなギャップに複雑な思いを持ちました。

南アの社会保障制度と失業率

最近、新聞記事で気になったのは南アの社会保障制度についてです。南アは豊かな鉱物資源を持ち、最先端の産業もあることから国の財政は比較的安定しており、遠隔地域で家族が失業しているような状況でも高齢者や障害者、子供たちが生活して行かれるよう助成をしています。高齢者年金は積み立てをしていなくても自動的に女性 60 歳、男性 65 歳から月々R1260（約 15000 円）、子供一人当たり R290（約 3500 円）が支給されます。年金の受給日と方法は基本的にそれぞれの受給者が決めるのですが、遠隔地では地域の集会所での現金支給のため、周辺にはマーケットができて、月に一回のお祭りのような状態になります。このように年金は地域経済を作りながら、多くの家庭生活を支えていますが、人々が社会保障に頼りすぎる危険性も含んでいます。The Mercury 紙 6 月 28 日付記事には“社会保障受給者が雇用者数を上回る”とあり、2001 年には受給者 100 人に対して雇用者は 330 人だったが、昨年度は受給者 100 人に対して雇用者は 90 人となり、このままでいくと社会保障制度を維持するのが難しくなる、というリサーチ結果が報告されています。記事の中で特に注目したのは、“政府が遠隔地域の学校を無償にし、子供たちが学校に通える状態にはなっているが、残念ながら社会で活躍できる人材を十分に作り出すような教育の質の改善には至っておらず、結果として経済への貢献も十分でない”という部分です。私たちは活動を行う中で常にこの状況を目の当たりにしており、“教育の質の改善”への支援に取り組んでいます。記事の中でゴーダン財務大臣は、“社会保障は基本的に雇用につながるものではない。我々が今直面している大きな課題はどのように若者の就職の機会を作るか、ということだ”と述べており、若者の失業率の高さが大きな社会問題であり、政府が早急に何らかの手立てをしなければならないと認識していることが伺えます。

この問題は南アだけではなく、世界各国での問題でもあると思います。ヨーロッパ、特にギリシャ、スペインなどでは、大学教育を受けて、博士号までもっていても就職できない若者たちが“ロストジェネレーション”と呼ばれ、比較的経済が安定しているドイツやイギリス、南米など新興国に職を求めて移住するようになってきているという CNN の取材番組を見ました。南アの場合は、仕事がないわけではありません。新聞の求人欄には毎日たくさんの企業や省庁からの募集が出ていますが、仕事内容にあったスキルを持つ人材が少ないのです。最近は、大企業への就職を目指して何とか子供を大学まで通わせようと、生活が厳しい中で必死に学費を工面している家庭を見かけます。ただ、大学に行けば必ず就職できるというわけでもなく、次のハードルは“経験”です。経験がないから就職できないのであれば、いつ経験を積むことができるのか、若い人たちの不満は募るばかりです。

地域の産業振興に農業

リチャード・ヘイグ氏から有機農業の指導を受ける先生と生徒たち

就職をするためにはほとんどの場合、都市部に出なければなりません。自分が生まれ育った地域で仕事をし、生活をすることは不可能なのでしょうか。私たちが活動している地域には広大な土地があり、比較的気候もよく、若くてエネルギーのある人材があることから、地域の産業振興には農業が最適であるといえます。しかし、アパルトヘイト制度の影響やズールー人の伝統・習慣など様々な理由により、地域の人々は農業を職業としてきませんでした。そのため、たとえ若い人たちが農業の有効性に気付いたとしても、学ぶ場所も人材もないため、どこから始めたらいいのかわからない、という状態です。学校でも設備や資金不足から生徒が技術を得る機会はほとんどなく、少し前までは卒業試験の合格率ばかりを気にかけていたような高校の校長も、大学にも行けず、就職も出来ない卒業生が増加していることから、生徒に技術を学ばせることの必要性を訴えるようになってきています。

学校を拠点とした有機農業促進のモデル地域作り

そのような背景の中で、7月からJICA草の根技術協力事業として、“学校を拠点とした有機農業促進のモデル地域作り”プロジェクトを開始します。学校での菜園活動は“生徒が楽しみながら畑作りの技術を得て、収穫の喜びを体験する”というプロセスを通して農業が将来の仕事の選択肢となることや、収穫が給食や孤児家庭への支援に使われることで生徒の生活改善に役立つ、生徒のリーダーシップ力を伸ばす、などの効果が期待されます。また、菜園活動を保護者家庭に広げていくことで、地域全体で人々が自分たちの手で食糧を生産し、自活できるようになることを目標としています。今回の事業では、“緊急課題”である若者の雇用促進への取り組みとして、対象校 4 校の敷地内に実習農園を設置し、各校の卒業生メンバーが有機農業の基礎的知識と技術を学ぶことで、将来農業に従事するための研修の機会とします。活動開始にあたって、州教育省地域担当マネージャーや州農業省スタッフ、地元NGOのメンバー（主に教師）たちと話し合いを重ね、対象校40校と実習農園設置の4校を決定しました。スタッフに関しては、有機農業専門家で自然農法による農場を経営するリチャード・ヘイグ氏、元地域の学校の教師で前回の事業でも指導員として活動してくれたシポ・ドゥルングワナ氏が研修会の講師として参加してくれます。また、この事業そのものを若者の経験の場にしたいと考え、学校巡回指導員には地域の農業専門学校の卒業生と、地元で州農業省のプログラムを終了した若者、サポートスタッフとして地元出身の若者1名の計3名と一緒に活動を行うことになりました。事業名の通り、対象地域が有機農業促進のモデルとなること、また、事業でのプログラムが実例として他地域でも取り入れられるようになることを目指しています。

新規学校図書活動支援プロジェクト

ルトゥリ高校のコンテナー利用図書室

4 月から新規でボランティア貯金助成金による学校図書活動支援プロジェクトが始まりました。昨年度の3地域から1 地域に絞り、32 校を対象として移動図書館車で巡回訪問指導をしています。1 地域と言ってもムタルメ・トゥートン・ウムズンベと3つの学区をカバーしており、沿岸部から山岳部まで広い地域でそれぞれ環境も異なります。圧倒的に山岳部のインフラ整備が遅れているため、最近では人々がどんどん沿岸部に移住してきて人口が増加しており、それに伴って沿岸部の学校の生徒数も急増しています。一番大きな小学校では生徒数が1200人を超えており、教室の増設が追い付かず、1クラスに50名以上の場合もあります。一方、悪路の山道を延々と走らなければ到達できないような学校では生徒数が年々減少しており、生徒数に応じて教師が配置されることから、1 クラスで 2 学年を教えなければな

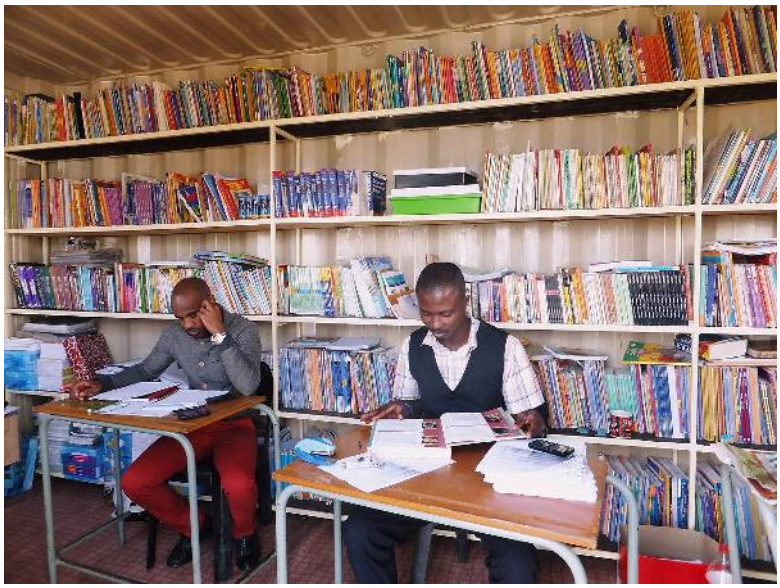
らないといった状況です。いづれにしても、学校にとって設備の改善と教材の充実が大きな課題となっています。昨年度同地域は16校を対象として活動を行いましたが、それらの学校は今年度も継続して事業に参加し、新たにプロジェクトへの参加希望があった学校の中から16校を対象校に加えて32校となりました。対象校選定で特に意識をしたことは、これまで巡回訪問している学校の隣、または近くの学校を必ず含めるということです。例えばプライマリー（小学校）で図書環境が整っても、隣のセカンダリー（中高校）に図書室がない状態では、生徒が継続して読書をする機会が持てなくなってしまいます。新規対象校は“待っていましたよ”とやる気を見せており、校長と司書教師が早速図書委員会を設置して活動への準備を整えました。5 月末の研修会で、新規校には“2 年目の学校に追いつくようがんばりましょう”と伝え、2 年目の学校には“新規対象校がやる気を見せていますよ”と話すと“今年は力を入れて活動するからね”との反応があり、いい意味での競争につながるのではないかと思っています。

コンテナーを使った学校図書室寄贈

昨年度はボランティア貯金の助成金で8校にコンテナー図書室を寄贈し、うち5校は今年度の対象地域内のため、多くの学校がTAAA寄贈のコンテナー図書室について認識しています。新規校で図書室として使えるスペースのない 6 校から“コンテナー図書室をサポートして欲しい”というリクエストが入ったのですが、今年度はボランティア貯金事業ではコンテナー図書室に対する助成がないため、TAAA で購入、寄贈することを計画しました。リクエストのあった6校のうち2校はセカンダリー（8年生から12年生）で、図書室がない現状では生徒が本を読む機会を持てず、リサーチなどもできないことから学習に限界があり、図書室設置を切望しています。小学校の場合、各教室にコーナーライブラリーを設置することで生徒が本に親しみ、徐々に読み書き能力をつけさせることができますが、高校の図書室設置は緊急課題ということで2校への支援を優先することになりました。

学校図書委員会の活躍

昨年度コンテナー図書室を寄贈した高校 3 校を訪問すると、図書室内で生徒が本を選んだり、読んだりする姿が見られ、司書教師からは“生徒はもちろん、教師も授業に利用する資料を探しに来たりしてとても有効に使われています”との話がありました。特に日本のインターナショナルスクールからの理数系の参考書は、教師が授業にすぐに使えると大変喜ばれています。各校ではまだ蔵書は十分とはいえませんが、図書室スペースができたことは学校にとって大きなモチベーションとなり、図書委員会メンバーが中心となって利用法や改善策についてアイディアを出し合っています。そのうちの一校、シトコジレ高校のコンテナー図書室内の本棚には事業で新たに購入して寄贈した本、TAAA 寄贈の本、これまで校長室に山積みになっていた蔵書や教科書などがずらりと並び、学校図書室としての役割を果たしています。最近、司書教師から相談を受けたのは、“教師や上級生は本を使いこなせているが、新入生や上級生の中にもまだ本に抵抗のある生徒がいて、彼らが進んで本を読むようにするにはどうしたらいいか”ということでした。そこで、今年は小学校高学年レベルの、生徒が興味を持つようなストーリーの本を購入し、読後に内容を十分に理解し、達成感を味わうことで生徒に自信をつけさせよう、という話し合いをしました。本は学習に使うだけでなく、“読書って楽しいんだよ”ということを生徒に伝えていきたいと思っています。



新規対象校の中には本棚はすでにあるけれども図書室として全く機能していない学校が数校あり、部屋の中はまるで倉庫のように古い机やいすが山積みで、本棚には埃だらけの古い教科書がびっしりと並べられていたりします。このような状況を目にすると“さて、どこから始めようか”とふつふつと意欲が湧いてきます。本棚があることは、全く何もない他の学校よりずっと恵まれていて、みんなで力を合わせれば比較的容易に図書室が開設できます。対象校はすべて設備環境やニーズが異なるため、それぞれの学校の状態を十分に把握し、校長や教師と話し合いながら、必要なサポート、適切なアドバイスを行うことを心がけたいと思っています。

←シトコジレ高校のコンテナー図書室

国内の活動

鯨井 幸一

５月１２日（日）の活動報告

『定例作業』

午前中は、南アフリカに送る英語の本の梱包作業を行いました。参加者は、野田さん。浅見さん。北爪さん。平林さん。大友さん。西村さん。鯨井の７名でした。南アフリカ事務所から、本のレベル分け（園児用・児童用・生徒用・専門書など）梱包の希望が出ており、平林さんの指導の下、細かいレベル分けの方針が決まりました。

４月１９日に、久我さんと大友さんが、事前に大量の本のレベル分けを行っていてくださり、それを、みんなが黙々とダンボールに梱包していきました。レベル分けのお蔭で、作業もスムーズに捗りました。

『帰国報告会』

午後は、ＴＡＡＡ南アフリカ現地代表平林薫さんの帰国報告会を行いました。

参加者は、野田さん、浅見さん、北爪さん、平林さん、大友さん、西村さん、久我さん、髙野さん、鯨井の９名でした。

まず、平林さんから現在の南アフリカの状況について、報告がありました。

教育関係では、初等教育大臣の進退が問題になっているとのことで、５月下旬までに結論が出るとのことです。
医療関係では、病院に関する問題が報告されていました。所得により、受ける医療の格差が如実に表れ、貧しい人は満足な医療を受けられないとの、報告がありました。
次は、スライドショーを使っての、プロジェクトの実施状況についての報告でした。

2013年より、支援地域を、クワズールー・ナタール州ウグ郡のムタルメ・トゥートン学区に絞り、菜園プロジェクトと図書支援プロジェクトを同じ学校で実施し、よりキメ細かい支援を行っていく方針が述べられました。

その中で菜園プロジェクトのファシリテーター、リチャードさんが、南アフリカの新聞の日曜版で紹介されたとの報告がありました。

ＴＡＡＡの移動図書館車『ITHEMBA（希望）』号は大変人気で、学校に到着すると子供たちが､鈴なりになって借りる本を物色し、学校に本が大変少なく子供たちが本に“飢えている”様子が写真から見て取れました。

また、教員に対する、図書の研修を行っている様子も紹介されました。

南アフリカの学校は本が大変少なく、ＴＡＡＡも２０年かけて３９万冊以上の本を寄贈してきましたが､全然足りていないのが現状です。また、図書室の不備や本棚やブックエンドも不足しており、支援の難しさを改めて認識させられました。

南アフリカ国内でも、リンポポ州で起きた教科書の紛失事件が物語っているように、政府レベルで図書を含む教育問題に真剣に取り組まない限り、TAAAがいくら図書プロジェクトを行っても、“焼け石に水”状態が延々と続く、悲しい現実が垣間見えた報告会でした。

岡三沢小などからいただいた算数セットです。

毎月第２日曜日に再梱包の作業を行なっています。

ムナフ小で、算数セットを開くのを見つめる子どもたち→

「輸出向け」農業は人びとを救えるのか

日本国際ボランティアセンター

南アフリカ事業担当　　渡辺 直子

6月1～3日に横浜で開催されたTICAD V に合わせてモザンビークから市民社会の代表および農民組織の代表ら3名が来日、5月31日に安倍総理に「公開書簡」を手渡した（※注１）。折しも日本およびアフリカ各国首脳、国際機関がこぞってアフリカ支援について話し合っているその傍らで彼らが求めたのは、日本のODA を使って行われるモザンビーク支援「プロサバンナ事業」の即時停止だ。いったい何が起きているのだろうか。

■「輸出向け」農業は人びとを救えるのか

現在、モザンビークでは人口の7割が農村部に暮らして自給的農業を営み、国内総生産の3割を生み出している。プロサバンナ事業の対象地域においても、家族的経営農業のもと主食のメイズや豆、葉物野菜や根菜類など様々な作物が収穫されている。「サバンナ地域」というイメージに反して雨も降ることから豊かな森林があり、人びとは森林からも木の実や果実、動物などの多くの食料を得ている。

こうした地域を対象に行われるプロサバンナ事業は、正式には「日本・ブラジル・モザンビーク三国協力による熱帯サバンナ農業開発プログラム」と言い、モザンビーク北部の1400万ヘクタール（日本の耕作面積の3倍）を対象に行なわれる大規模農業開発事業だ。大豆やゴマといった輸出向けの単一商品作物の栽培を導入し、「ナカラ回廊開発」として東部にあるナカラ港および内陸部一帯のインフラ整備とセットで行われる。すなわち、出来た作物の海外への販売を通じて農民の生活向上を目指すもので、実施者であるJICAによれば「中小農民40万人に直接、間接的には360万人の農業生産者に裨益する」という。

にもかかわらず現地の農民・住民たちからは事業に対する反対の声があがっている。
それは事業の実施によって海外投資が促進され、大規模な農地開発のために森林伐採や土地収奪が想定されているからである。そしてそれによって自分たちの生活が大きく変えられる可能性があるのに農民たちには何も知らされず、事業プロセスが不透明だという。
すでに多様な食料を生産している地域にこのような方法を持ちこんで、本当に自分たちの支援につながるのだろうか。こうした疑問の声が現地の人たちからあがるのは当然といえるだろう。

サバンナとはいえ雨も豊富で緑豊かな事業対象地（撮影：太田華江）

■現地農民が訴えること

2,200を超える農民組織から構成され、約8.7万人の農民がメンバーである同国最大の農民組織、全国農民連盟（UNAC）は、昨年10月に出した声明（※注２）から今回の「公開書簡」にいたるまで一貫して事業の見直し、すなわち現行のやり方に対する反対と農民・住民たちの事業形成プロセスへの「参加」を求めて声をあげているが、同時に彼らはその中で自らの農業のあり方を以下のように分析し、その将来像について以下のように提案している（一部抜粋）。

UNAC により経験交流「農民が農民から学ぶ様子」（提供：UNAC）

・農民は生命や自然、地球の守護者である。
・小農による農業は地域経済の主柱であり、農村における雇用に貢献し、都市や村落の存続を可能にしている。
・開発政策は、社会的にも環境的にも持続可能な方法で、民衆の現実のニーズや課題に基づいて組み立てられなければならない。
・UNAC は、土壌の尊重と保全、適切で適正な技術の使用、参加型で相互関係に基づく農村開発といった農民の基本に基づいた生産モデルを提案する。

・現在、世界の８人に１人が飢えていると報告されていが、モザンビークもこれに含まれる。したがって、モザンビーク政府の優先順位は、国内消費のための家族経営主体の小農部門の食料生産であるべきで、その内発的な潜在性を発展させることを試みるべきである。

モザンビークでは 2007 年度以降の経済成長率が 7%越える一方で、最新の統計で絶対的貧困下に暮らす人びとが人口の約 60%にものぼると報告されている。こうした中で何らかの国際的な支援が必要なことは UNAC ら農民たちも認めているが、それは例えば食料生産の足りない他地域に暮らす仲間達に自分たちの生産した食料を届けるための国内インフラの開発やローカルマーケット環境の整備であって、決して輸出用作物を販売して金儲けをすることではない。

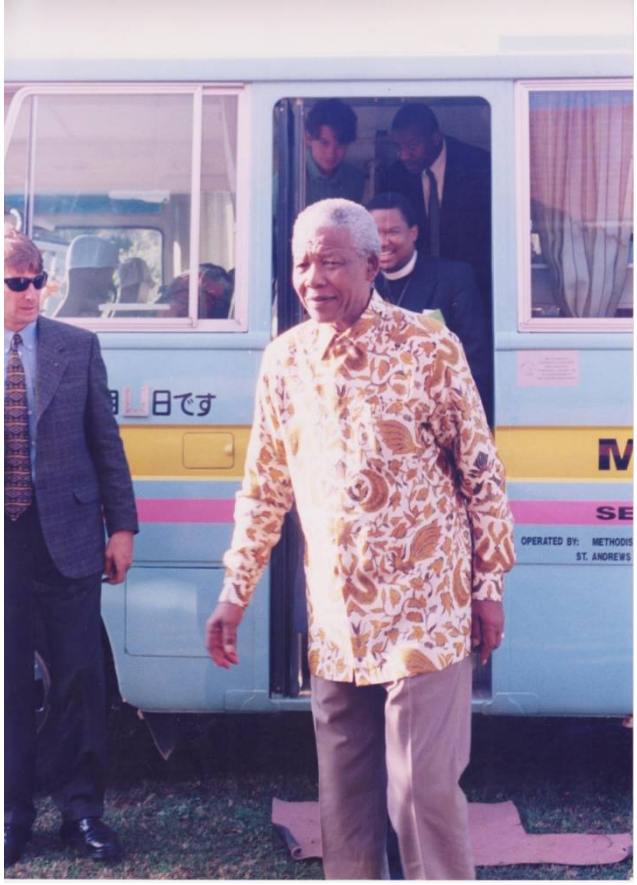
■求められる支援のあり方とは

貧困問題とは、そもそもその最中にいる人たちが無知であるがゆえに起きるのではく、様々な社会構造の軋轢が「たまたまそこに表れて」起きているものである。そうであるならば、このグローバル化された世界に同時代に生きるものとして「支援」とは「与える」＝「だから何をやってもいい」という一方通行のものであってはならない。
ＵＮＡＣ代表アウグストさんは「私はここで何十年にも渡り土を耕してきた。この土地に何が合うのか、自分たちが何を栽培し、何を食べたいのかは我々が一番よく知っている。だからまず我々に何が必要かを聞いてほしい」と断言した。
モザンビークの農民たちは現在確かに貧しいのかもしれない。しかしそのことは彼らが何も知らないことを意味しない。それどころかすでに述べたように、彼らは自分たち農業のあり方に誇りをもっているし、現状を客観視し、環境と共存した持続的な農業のあり方のビジョンを描いている。
我々に求められているのはこうした彼らの経験と知恵、そして農民としての誇りに敬意を払いながら、支援の方策を“ともに”考えていくことではないだろうか。

※注１：2013 年 5 月 28 日「プロサバンナ事業を緊急停止するための公開書簡」
※注２：2012 年 10 月 11 日「プロサバンナ事業に関する声明（UNAC）」。
いずれも詳細は、「モザンビーク開発を考える市民の会」の公式ブログ
http://mozambiquekaihatsu.blog.fc2.com/　を参照。

マンデラ氏の存在感

TAAA 代表　久我祐子



1998 年にマンデラ大統領は、TAAA の送った移動図書館車を訪ねた。

2013 年 6 月 23 日、南アフリカ大統領府は、ネルソン・マンデラ氏が危篤状態に陥ったと発表しました。　その後、氏の容態は油断はできませんが、安定していると報道されています。

私は報告会の挨拶で TAAA を紹介するときに必ず、TAAA の設立年が 1992 年であることを伝え、マンデラ氏が釈放された 1990 年と、同氏率いる民主主義南ア国家が新生した 1994 年の移行期の渦中にこの会が生まれたことを説明します。それは、日本の市民として、アパルトヘイトという長く暗いトンネルをくぐり抜けて、民主化への第一歩を踏み出した南アの人々と共に歩みたいという前代表野田千香子の強い意志が設立のきっかけになったこと、そしてその志が今でも活動の根底にあることを強調したいからです。　野田千香子がそう決意した背後には、ネルソン・マンデラ氏という時代の主人公がいました。

私自身も、もしも心から尊敬するマンデラ氏の存在がなかったら、これほど南アにのめり込むことができたかどうか正直分かりません。野田や私だけでなく、会の多くのメンバーにとって、マンデラ氏は大きな存在です。

しかし、私は今まで活動にかかわる中で、また活動を紹介する時に、あえてマンデラ氏のことを言及することは控えていました。どこかで「マンデラ氏率いる南ア」と捉えられること、そして自分もそう考えることを躊躇していました。ご存じの通り、反アパルトヘイト闘争時代は、マンデラ氏以外にも多くの大物リーダーがいました。しかし彼ら以上に、子供を含めた名のない民衆が立ち上がり、多くの尊い命の犠牲も伴った、民衆の闘いであり勝利でした。そして新生南アの民主化の過程においても、草の根で奮闘する多くの無名のリーダーたちがいました。私自身、今まで会の活動を通して、様々な地域や分野で、コミュニティーや生徒たちのために献身的に働く凄い人たちを多く見聞きしてきました。「私達の会は、日本の名のない一般市民が南アの草の根でがんばる名のない一般の人たちと手を携える会なのだ」という意識で活動してきたこともあり、彼らがどれだけ新しい南アを底辺で支えてきたかを思うと、マンデラ氏を枕詞に南アを語ることには、正直抵抗があったのです。

マンデラ氏の著書を読むと、マンデラ氏自身も「俺についてこい」といったリーダーでは決してなく、普通の人々に各々のレベルでリーダーシップを発揮して、新しい国作りに参加してもらいと願っていたのではないかと思います。　「マンデラの国」ではなく、一般の人たちに「自分たちが新しい国を作っているんだ」と主体性と誇りをもって思ってもらいたかったのではないかと思います。

氏の著書の中で、「リーダーとは羊飼いのようなものだ。元気のいい有能な人にどんどん前にいって集団をひっぱってもらい、リーダーは後ろから羊飼いのように全体を見渡しながらついていくものだ」といっています。氏はこのリーダー論を、幼い頃、村の長老の言動から学んだそうです。　南アの特異な歴史の中で、必要に応じて時に強いリーダーシップを駆使し、またカリスマ性を活用した豪腕政治家だったとおもいますが、基本的には若い頃から、主権在民と平和の精神を大切にして、後ろからやさしくついて行く包み込むようなリーダーだったのではないかと思います。人々をインスパイアしてリーダーを育てていく、ある意味で真のリーダーだったといえるでしょう。

1999 年に政界を引退した後も、世界的グレートリーダーとして精力的に活動を続けられたマンデラ氏。　南アも世界も大きな精神的大黒柱が、かつてのように精力的に活躍してくれることは、期待できないかもしれません。しかし、第二のネルソン・マンデラをひたすら待ちわびる時代では、もうないのだと思います。今の時代は、カリスマ的なリーダーを求めて引っ張っていってもらうのではなく、一般の人々がそれぞれのキャパシティで動くことで、政治家や国、そして世界を動かしていく、そういう時代なのではないでしょうか。南アでも日本でも。

TAAA はこれからも、マンデラ氏にインスパイアされて、草の根で新しい地域作り、国作りに奮闘する名のないリーダーや彼らを賢く支えるフォロアーたちと共に歩んでいきたいと思っています。

マンデラ氏のご快復をお祈りしております。

NPO 法人化の報告

以前より「アジア・アフリカと共に歩む会」（TAAA）の特定非営利活動法人化（NPO 法人化）についての議論は長い間、懸案事項として繰り返し、議題に上がりながら、宙に浮いていました。貸借対照表を付ける決算報告の作成などを考えると二の足を踏まざるを得ない状況にあったわけです。更に純粋なボランテイアグループとして NGO でいたいと言う意見があったことも事実です。

しかし将来申請を考慮するファンドの中には、NPO であることが必須のものもあり、又決算書作成については自治体の指導を受ける事もでき、いよいよ NPO 法人化に踏み切りました。定款の設定、理事会の開催、総会の開催と手探り状態ではありますが手順を踏んでの船出となりました。

２０１３年２月に TAAA は特定非営利活動法人として認可されました。

NPO 法人化の最大のメリットは何と言っても社会的な認知度が高まるということです。　しかしそれに伴って社会的な責任も生じると言う事にもなります。これまで以上に国内外に対する責任を自覚して事業継続に尽くす覚悟を再認識する事にもなりました。

TAAA 会長
浅見 克則

毎　日　新　聞　〔第３種郵便物認可〕

毎日新聞 2013.6.15(土)

経済発展が生む貧富の格差

「今も教科書 十分でない」

南アの子供に本贈り21年 共に歩む会

賛同者を募集中

南アフリカの子どもたちに本を贈る活動を続ける「アジア・アフリカと共に歩む会」（さいたま市中央区）が、創立21年目を迎えた。前代表で現事務局長の野田千香子さんらが「字の読めない黒人女性のために、英語の教科書がほしい」との訴えを聞き、本を贈ったのが同会設立のきっかけ。野田さんは「当初は10年もすれば状況は好転すると思ったが、今も貧しい子どもたちが多く教科書も十分でない」と、賛同者を募っている。【鴇沢哲雄】

活動が始まった1992年当時は、長く続いたアパルトヘイト（人種隔離）政策が終わりを迎え、民主的な国造りへの転換期だった。学習塾を経営していた野田さんは、日本での反アパルトヘイト運動を支援。そんな時に「黒人の多くが学校に行っていない」と聞き、活動をスタートさせた。

教科書として、中学校の英語教材が役立つとわかり、インターナショナルスクールなどに協力を求めると、続々と本が集まり支援の輪が広がった。毎年1万8000～3万冊を贈り届けている。

現在、会員は約10人だが、寄付をするなどの支援者は約400人いる。会員らは毎月、さいたま市内の倉庫で全国から届いた本を整理、段ボールに詰め直し船便で送る作業をしている。倉庫の壁には「Primary（小学生向き）」「Academic（専門書）」などの分類法や、箱に詰める手順などが書かれた紙が張られている。市内の高校生が手伝いに来るため、作業をしやすいようにとの工夫だ。

会ではこれまでに書籍類のほか、子どもたちが大好きなサッカーボール900球や、廃車になった移動図書館車28台を市町村から譲り受け、現地に送った。野田さんは「本を手にした子どもたちの笑顔が励みになります。南アの経済発展は逆に貧富の格差を生んでいる。これからも地道に活動を続けたい」と話している。問い合わせは同会事務局（☎090・7702・4939）。

南アに送る本を段ボールに詰めるボランティアたち＝さいたま市中央区で

2012 年度(平成 24 年度)TAAA 決算書

Ⅰ:一般会計

（収入の部）

寄付金			1,116,186
会費		1．会費	95,000
		2．賛助会費	20,000
TAAA 南ア事務所寄付金その他			
物品販売収益			59,540
助成金	1． 国際協力機構		4,707,541
	2． ひろしま祈りの石		500,000
	3． 財・埼玉県国際交流		500,000
	4． ゆう貯財団		9,037,420
受取利息			612
		計	16,036,299

（支出の部）

国内図書関係費	303,835
南ア事務所活動費	13,289,631
JICA 国内活動費	379,500
南ア視察費	1,208,550
通信費	160,360
事務費	67,985
旅費交通費	54,090
印刷費	139,410
水道光熱費	8,897
雑費	119,286
租税公課	7,800
計	15,739,344

（南ア事務所活動費内訳）

	入金	出金	残高
前期残高	1,167,706		1,167,706
今期活動費送金	12,121,925		13,289,631
1．国際協力機構		2,220,501	11,069,130
2．ボランティア貯金		8,328,230	2,740,900
3．南アTAAA活動諸費		1,860,343	880,557
今期残高			880,557

Ⅱ:収支決算書

	前期繰越金	4,014,188
＋	一般会計収入	16,036,299
－	一般会計支出	15,739,344
	次期繰越金	4,311,143
		0

2013年　6月　9日

会計:　髙野千恵美

会計監査:　米山周作

◆ 主な活動（2013年1月16日～2013年6月30日）　　下線は南アにおける活動

1/28 南アに帰国　　TAAA南ア代表　平林薫
1/30 住所ラベル更新　　西村裕子
1/30～31 学校巡回訪問準備(本の整理)　　平林
2/1～20　会報61号編集校正　　野田千香子　　西村
2/1 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
2/4～8 プンガシェ地域学校訪問　　平林
2/10 梱包作業　野田　西村　浅見克則　北爪健一　髙野千恵美　丸岡晶　鯨井幸一　浦和学院高校より鎌田茉莉、若槻美穂
2/11～12 ドゥドゥドゥ・ヒバディーン学校訪問　平林
2/13 図書研修会プンガシェ地域　　平林
2/4 州教育省ウグ郡ダイレクター・シバヤ氏と会議
2/15 ・18～19　ドゥドゥドゥ・ヒバディーン学校訪問
2/18 本のレベル別分類作業　大友深雪　　久我 祐子
2/20 図書研修会ヒバディーン地域　　平林
2/21 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
2/22 JICA事業報告会（スカイプ会議）　久我　　平林
2/22～23 プレトリア出張（JICA会議）　　平林
2/25 JICAへ打ち合わせ会議　　久我　　野田
2/25 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
2/26 ボ貯金事業視察団と学校訪問（ヒバディーン地域）
2/27～28 ボ貯視察団と学校訪問・教師研修会（ドゥドゥドゥ地域・ンドウェドウェ地域）　平林
3/1 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/1～11 会報61号発送準備・発送　　髙野　　野田
3/3 JICA事業第2次審査　　久我
3/3～4 プレトリア出張JICA会議　　平林
3/5 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/6 埼玉県税務署へ法人設立届け　　久我
3/6～7 ドゥドゥドゥ地域学校訪問　　平林
3/10 梱包作業　　榊裕美　浅見　鯨井　西村　髙野
3/12 サンの学校へ本とサッカーボール送付　　浅見
3/12 ダーバンにて移動図書館搭載用本購入　　平林
3/13 ボランティア貯金寄附金実施計画書提出　久我
3/13～15 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/15 ﾌﾟﾝｶﾞｼｪのﾝｼｬﾙﾜﾈ小で保護者対象菜園研修会開催
3/18 学校図書室用備品購入配付(プンガシェ)平林
3/19～20 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/20 サッカープロジェクト会議　　久我　　野田
3/21 作業場への本の搬入と梱包作業　　北爪
3/25 国際交流協会事業完了書提出　　久我　　野田
3/25～27 ヒバディーン地域学校訪問　　平林
3/28・4/3 図書プロジェクトスタッフ会議　平林
4/2 図書室用本棚製造者ノンビカ氏と打ち合わせ
4/4 JICAミーティング　　久我
4/4～5　学校巡回訪問準備(本の整理・システム入力)
4/8～9 学校巡回訪問準備(本の整理・システム入力)
4/9 出納帳点検　　野田
4/11～12 ・15ムタルメ地域学校巡回訪問　　平林
4/16 プンガシェ地域学校訪問　　平林
4/18 URDO(教員のNGO) メンバーと会議　　平林
4/19 ムタルメ地域学校巡回訪問　　平林
4/20 図書プロジェクトスタッフ会議　　平林
4/20～5/5 決算書作成　　髙野
4/22～26　ムタルメ・ドゥドゥドゥ地域学校訪問
4/25 エナレニ農場ヘイグ氏と会議　　平林
4/29 州農業省ムタルメ支部ギダ氏と会議
4/30 ムタルメ地域学校巡回訪問　　平林
5/2～3 ﾑﾀﾙﾒ地域学校訪問・州教育省ｻﾞﾐｻ氏と会議
5/6　TAAA南ア代表平林薫一時日本へ帰国
5/9 打ち合わせ会議　　平林　　久我
5/10 埼玉県NPO法人経理説明会　　久我
5/12 梱包作業 北爪 浅見 野田 西村 鯨井 平林 大友
5/12　南ア活動報告会　　平林　久我　浅見　北爪　髙野　大友　鯨井　野田
5/12 ミーティング　　平林　　久我　浅見　野田
5/14 (株) コンセプション訪問　　久我　平林　野田
5/15 JICAミーティング　　久我
5/22 ミーティング　　久我　　平林
5/24 TAAA南ア代表平林南アへ戻る
5/27 図書研修会準備　　平林
5/28 移動図書館車整備　　平林
5/29 ～30図書研修会グループ1・2　　平林
5/30 埼玉県国際交流基金申請書提出　　久我
5/31 ムタルメ地域学校巡回訪問　　平林
6/4～7 ムタルメ地域学校巡回訪問　　平林
6/8 農業指導員面接　　平林
6/9 本の搬入　　鯨井
6/9 作業　浅見　野田　西村　髙野　鯨井　下谷房道　浦和学院高校より武内月穂、井上紗希、久保木理紗
6/9 理事会　　久我　　浅見　下谷　野田　鯨井
6/10 ～11 ムタルメ地域学校巡回訪問　　平林
6/12 本の分類　　大友　　久我　　野田
6/12 ムタルメ地域学校訪問・州農業省ギダ氏と会議
6/13 ～14ムタルメ地域学校訪問・農業指導員面接
6/15 住所ラベル更新　　西村
6/15 ASIJへ本引取り　浅見　　茂住　津山ネオ
6/18～20 ムタルメ地域学校巡回訪問　　平林
6/21 学校図書室寄贈用備品購入　　平林
6/24 学校巡回訪問準備(本の整理・システム入力等)
6/24 JICAミーティング　　久我　　浅見
6/25 農業指導員面接　　平林
6/26 図書プロジェクトスタッフ会議　　平林
6/27～28 学校巡回訪問準備（本の整理・システム入力等）　　平林
6/28 東京インターナショナル校本引取り　　浅見